情報伝達文産出に関わる書き手のメタ認知の構造の検討(1)

崎濱秀行
(阪南大学経済学部)

キーワード: 情報伝達文産出 メタ認知 メタ認知的活動

A study of Meta-cognition on expository text writing(1)

Hideyuki SAKIHAMA

(Faculty of Economics, HANNAN Univ.)

Key words: expository text writing , meta-cognition , meta-cognitive activity

目 的

本研究の目的は、崎濱（2003）で作成された情報伝達文産出に関わる書き手のメタ認知の構造を検討する尺度の改良版を作成することである。

崎濱（2003）は大学生・専門学校生を対象に、14 項目で構成される質問紙を用いて書き手のメタ認知的知識およびメタ認知的活動の構造について検討を加えた。その結果、メタ認知（メタ認知的知識・メタ認知的活動）の構造として、「伝わりやすさ」「読み手の興味・関心」「簡潔性」の3側面の存在を見出した。また、文章産出スキルの高い書き手は「伝わりやすさ」を、文章産出スキルの低い書き手は「簡潔性」を重視していたことについても示された。

しかしながら、崎濱（2003）では調査における項目数が14項目と極めて少数であったことから、メタ認知の構造について検討するにはさらに項目を追加して多面的に検討する必要があると考えられる。そこで本研究では、まず予備調査により追加項目を収集する。そして、質問紙調査によりメタ認知（本研究ではメタ認知的活動）の構造を検討する。

予備調査

参加者 愛知県内の大学生・専門学校生 43 名（男性 25 名、女性 18 名、平均年齢 19.7 歳）

材 料 自由記述質問紙

方 法 参加者には自由記述質問紙を配布し、情報伝達文産出の際にどのようなことに気をつけながら文章を産出するかについて自由記述を求めた。

結 果 得られた回答について、心理学を専攻する大学院生 3 名が検討を加え、同じ内容の項目の集約を行った上で最終的に 10 項目が得られた。

本 調 査

参加者 愛知県内の国立大学生 158 名（男性 64 名、女性 94 名、平均年齢 20.0 歳）

材 料 書き手のメタ認知の構造を検討するための質問紙（以下、質問紙と記述。崎濱（2003）の 14 項目に予備調査で得られた 10 項目を加えた後、筆者と文章産出経験の豊富な 60 代大学教員が各々の項目を吟味し、本研究の目的に合うような形に表記の加筆修正を行った。）

手続き 参加者には質問紙を配布した。そして、情報伝達文産出の際の各々の活動への取り組みについてどの程度当てはまるのかを 7 件法（1：まったくあてはまらない ～ 7：非常によくあてはまる）で回答するように求めた。

結果と考察

書き手のメタ認知的活動の構造を検討するため、因子分析を行った。固有値 1 以上、因子負荷量 0.35 以上を基準に因子数を決定し、3 因子を抽出した。十分な因子負荷量を示さなかった項目を削除した上で再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行い、解釈可能性等を考慮して、最終的に 3 因子を抽出した（TABLE 1 参照）。

第 1 因子には、34「文と文とのつながりに気をつける」50「文末の表現に気をつける」などの項目が高い負荷量を示した。全体として、文章全体の伝わりやすさに関連すると思われる項目で構成されていることから、「伝わりやすさ」因子と命名した。

第 2 因子には、17「読み手が内容に興味をもってくれるようにする」24「読み手が自然に読み進んでいけるような文章にする」等の項目が高い負荷量を示した。全体として読み手の興味関心に関連すると思われる項目で構成されていることから、「読み手の興味・関心」因子と命名した。

第 3 因子には 37「難しい言葉をできるだけたくさん使う」、15「難しい表現をできるだけたくさん使う」などの項目が高い負荷量を示した。全体として、簡潔性に関連すると思われる項目で構成されていることから、「簡潔性」因子と命名した。

次に、尺度としての内的整合性を検討するため、下位尺度ごとに α 係数を求めたところ、第 1 因子から順に、 $\alpha = 0.88, 0.85, 0.81$ と高い値が得られた。このことから、尺度としての内的整合性が確認されたといえよう。

本研究では崎濱（2003）に項目を追加および加筆修正して書き手のメタ認知的活動の構造を検討したが、結果として崎濱（2003）とほぼ同様に「伝わりやすさ」「読み手の興味・関心」「簡潔性」の 3 側面の存在が示された。今後は文章産出スキルの高さによるメタ認知的活動の度合いの違いなどについても検討することが求められる。

TABLE1 因子分析結果

項目	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子
34 文と文とのつながりに気をつける	.75	.66	-.13
50 文末の表現に気をつける	.28	-.17	.09
52 文章全体の流れを自然にする	.73	.70	-.11
49 「です・ます」や「だ・である」を統一する	.70	-.27	.07
30 文として成り立つようにする	.67	.11	-.09
48 段落分けをする	.58	-.15	.09
39 主語と述語とのつながりに注意する	.57	.13	-.04
46 文章全体として、まとまりのあるものにする	.56	.33	-.10
41 必要最低限のことがらはもらさないようにする	.51	-.11	.17
33 論点を明確にする	.50	.31	-.01
54 漢字を間違えない	.45	.18	.11
3 誤字・脱字に気をつける	.44	.09	.04
17 読み手が内容に興味をもってくれるようにする	-.10	.92	.06
24 読み手が自然に読み進んでいけるような文章にする	.04	.76	-.01
12 最後まで読んでもらえるようにする	.01	.75	.00
23 読み手の興味がありそうなことを選ぶ	-.22	.69	.52
29 読み手が見ても判りやすい文の構成にする	.28	.64	.05
10 読み手が持っている興味・知識や体験について考える	-.10	.64	-.02
45 自分ならこういうことから知りたいな、と思う順にことがらを並べていく	-.02	.35	.07
37 難しい言葉をできるだけたくさん使う	-.13	.07	-.82
15 難しい表現をできるだけたくさん使う	-.18	.12	-.70
43 難しい漢字や熟語を使わない	-.08	.17	.69
18 固くない言葉を使う	-.09	.29	.65